

5才児の 身体表現力の変化

若松 美恵子

1. 研究目的

5才児の身体表現の1年間の指導において、その身体表現力がどのように変化したかを明らかにする。

2. 研究方法

- (1) 観察対象 東京都内の私立N幼稚園
5才児 2クラス
- (2) 観察期間 昭和61年4月～62年3月
- (3) 手順 園の保育計画や内容を考慮し、およそ1ヶ月に1回のペースで身体表現の指導を計画した。予め、研究者と幼稚園の教務主任、担任2名で、指導のねらいと概要について検討し、指導案作成と指導は、担任が行った。指導時には、保育室の一隅から、子ども達の動き全体をVTRに収録した。指導後には、4名で反省会を行い、記録した。記録の整理と、VTRによる動きの分析から検討し、明らかにする。

(4) 身体表現力を明らかにするための観点

①「動き」 題材をどのようにとらえ、どのように動くか。身体の部位や運動の種類。多様性、律動性、極限性などの観点からみる。②「教師や子どもとの関わり」 教師と子どもがどのように関わりながら、心と体が開放され、題材が深まり、動きが広がり高まるのか。③「表現体になりきって動き続ける」 これはそのものになりきって動くことを楽しみ、さらに動き続けることができるという、指導や表現への集中度をみる。

3. 結果と考察

動きの主な特徴はおおよ次の通りである。4月の「蝶」では、蝶の変態の細かな様子を形や動き方の特徴をとらえ、体幹の動きとの関連で、上下肢をよく動かして表現している。5月の「伸びる・縮む」では、運動課題から表現への指導であったので、指示の方向や高さで動きを工夫し、極限性が広がり動きが大きくなった。6月の「宇宙探検」では、走一跳躍一回転など、高低の変化に富んだ動的な一連の動きもみられるようになり、又、教師の擬音により、回転一跳躍の一連の動きの反復もみられるようになった。そして一連の動きの中でテンポの変化がみられ、動きにリズムが感じら

れた。9月の「新聞紙」では、新聞紙の色々な状態を細部にわたってよくとらえ、屈曲した体幹の動きと、高低の変化に富んだ一連の動きと、連続した2種類の運動の反復により、動きにメリハリができ、表現したいことをより強調して表現するようになった。又、動きの速さのコントロールができるようになり、動きがよりリズムカルになり、変化に富むようになる。10月の「さる・かに合戦」では、ストーリープレイであったので、全体的に登場人物の動きや形の特徴を1つとらえて表現するであり、体幹の屈曲した動きや全身の大きな動きが少ない。そして、多くの子どもが、各々の役につき動きを1つみつけて反復するであったが、動きは継続していた。1月の「音」では、楽器の音を聞いて表現するであったが、動きは、2種類の運動の複合的な反復や、回転+跳躍などの連続した2種類の運動の反復も多くみられ、子ども間に多様性がみられる。グループ創作も行われ、隊形の工夫や異なった動きの構成もみられた。2月の「おもちゃ箱」では、おもちゃの形や動きの特徴を各自1つとらえて反復するが、題材の性質からか、体幹の屈曲した動きは少なめであった。しかし子ども間に多種多様な動きがみられ、個人、グループ共に、高低の空間の広がりが見られた。3月の「クレヨンの冒険」では、教師が擬音を発しながら紙に描いていくクレヨンの線や絵の形や勢いを全身の活発な動きで表現した。走+跳躍+回転などのダイナミックな一連の動きで、又、跳躍しながら回るなどの2種類の複合的な動きなど、場の移動や高低の変化の多いダイナミックな動きやリズムカルな動きがみられた。

教師や子どもとの関わりについては、4月、5月では、教師に注目しながら部屋一杯に広がり、個人で動くが主である。6月～11月では、空間を広く使い、個人個人で動くが主であるが、動きの中で、周りの友達と関わりながら動いたり、2～3人での表現を楽しむ。1月～3月では、各人の自由な表現の時、1人のみならず2～3人で臨機応変に動く。又、グループ創作もできるようになる。

表現体になりきって動き続けるについては、4月、5月では、多くの子どもが表現体になりきって表現しているが、一部の仲良しが一時的にくっついて、表現活動が十分でなかったり、又、指導時間が長くなると、時々だらけて友達の動きを眺めていることがあるが、ふざけに発展することはない。6月～11月では、声を発しながら集中して表現体になりきって動くが、表現内容がよく理解できなかった部分では、思いきってなりきることができない。1月～3月では、指導中を通してよく教師に集中し、かつ声を発しながら活発に動き続けた。

4. まとめ

5才児の身体表現力の変化をおよそ次のようにまとめられる。「自由な身体表現活動ができるようになった」4才児の1年間の指導を土台とした5才児の身体表現であったが、その表現力は、題材の細かな変化を体幹の動きとの関連で、上下肢の微妙な動きで表わそうとする段階から、次第に体幹と上下肢が一体となった、全身の大きな動きになってきた。そして、その動きは、動的な一連の運動やその反復により、リズムカルな、より感じをとらえた個性的な表現となり、5才児の終わり頃には、2・3種類の一連の運動や、2種類の複合的運動の反復もみられることにより、動きの空間が広がり、リズムカルでダイナミックな動きが増え、「より感じをとらえた1人1人の動き」の感が強くなる。又、友達との自由な関わりをもった個人の表現から、1・2月頃には、グループ創作活動もできるようになり、発表・鑑賞を楽しむことができるようになった。又、全般に、教師に注目しながらも各人が表現を楽しんでいるのが、5才児の中頃からは更に、集中し、なりきった時などは、声を発しながら表現体になりきり、楽しんで活発に動くようになった。

このように、5才児の1年間の指導において、子ども達の表現力の向上がみられた。それは、4才児での、身体表現を自由に、そして集中して行えるようになったという土台の上の表現技能の向上と言ってよいだろう。そして、これは、5才児の身体的、精神的、社会的発達に支えられた身体表現力の変化といえよう。

参考文献

- (1) 松本千代栄, 幼児教育学全集6 小学館
- (2) 柴紘子・柴真理子 動きの表現—想像から創造へ—星の環会
- (3) 柴真理子(1982) 表現的な動きの発達に関する研究 神戸大学教育学部研究集録 第68集
- (4) 佐分利育代(1986) ダンスの即興表現の発達について —聴覚障害児を対象として— 山陰体育学研究 第2号